

書 評

“死の鉄道”建設のもたらしたものの

—— タイ・デンマーク先史学調査隊の報告 ——

The Thai-Danish Prehistoric Expedition 1960-62, *Archaeological Excavations in Thailand*, Vol. I, Sai-Yok, 129 p., 33 pls., by H. R. van Heekeren & C. E. Knuth; Vol. II, Ban-Kao, 164 p., 140 pls., by P. Sørensen. Munksgaard, Copenhagen, 1967.

瀬戸口烈司\*

本書は、1960年から62年にかけて、タイ国とデンマークの科学者によっておこなわれた、考古学的発掘調査の正式報告書の一部である。報告書は全部で4巻ないし5巻になる予定であるが、まずそのうちの1巻と2巻だけが出版された。戦後、とくに1950年代の後半から、東南アジアは考古学上の調査研究の主要な国際競争の場となり、各地で、各国による発掘がなされているが、戦後の組織的発掘調査の報告書としては、The Thai-Danish Prehistoric Expedition 1960-62による本書が最初のものである。

I 先史学からみたタイ国

南アジアおよび東アジアの戦前までの先史学的研究の発達は、それらの地域が西ヨーロッパ諸国によって植民地化されていたという事実と深くかかわりあっている。ふつう植民地の宗主国は、植民地の地下鉱産資源開発などの必要性から、出先の研究機関として現地に地質調査所などを設け、本国から研究者を派遣して調査・研究をすすめていた。植民地の経営には直接にむすびつかない各種研究機

関もやがて開設されて、そこを中心にしてそれぞれの分野の研究がすすめられるようになる。植民地経営にとって、ほとんど経済的利益をもたらすことのない先史学的研究の多くは、このようにしてすすめられていた。たとえば、インドの The Geological Survey of India, 旧フランス領インドシナの Service géologique de l'Indochine および Ecole Française d'Extrême-Orient, 旧オランダ領東インドの The Geological Survey of the Netherlands East Indies および The Archaeological Survey of the Netherlands East Indies, 中国の中国地質調査所, 北京協和医学校, 北満特別区文物博物館 (のち, 大陸科学院ハルピン分院), 北疆博物館 および新生代研究所などがそれである。

タイ国は東南アジア諸国のなかで植民地化されたことのない唯一の国である。おそらくそれが原因となって、戦前まで、タイ国では先史学的研究はほとんどなされておらず、資料もほんのわずかしかなかった。<sup>9)</sup>たとえば、前期旧石器時代文化については、北インド (ソアン文化), 北中国 (周口店文化), ビルマ (アニャト文化), マラヤ (タン

\* 京都大学東南アジア研究センター

パン文化)、ジャバ(パチタン文化)が知られているが<sup>5)</sup>、タイ国に関しては何ら資料は得られていなかった。これらインドから中国、東南アジアにかけてみられる文化は、Chopper-Chopping Tools を組成の主体としたもので、打割石器の文化と呼ばれている。<sup>5)</sup> 地理的にはタイ国は打割石器の分布の中心に位置しているから、タイ国に打割石器の発見されることが十分に予想される。

## II 調査隊成立以前

考古学ないし先史学上の研究は、ぐうぜんの遺跡の発見と、それにつづく本格的発掘調査によって進展する。今回の、タイ・デンマーク両国による発掘調査のきっかけをつくったのは、第二次世界大戦中、日本軍が企画したタイのバンコクとビルマのムールメンをむすぶ鉄道(泰緬鉄道とも呼ばれる)の建設であった。<sup>10,11)</sup>

日本軍は大戦開始当初から、タイ国とビルマをむすぶ鉄道輸送路の建設を計画していたが、タイ国バンコク西方のカンチャナブリから、ノーイ川(Kwae Noi)に沿って同川をさかのぼり、タイ・ビルマ国境をなすテナセリウム山脈のスリー・パゴダ・パスをこえて、ビルマ側タンビザヤに達する鉄道路線を敷設し、バンコクとムールメンをつなぐ鉄道工事に着手した。1942年7月のことである。日本軍はこの工事に、日本人部隊、現地人労務者以外に連合国側捕虜をあたらせたが、ジャバで日本軍の捕虜となったオランダ人の H. R. van Heekeren も、工事に従事させられるためにタイ国に送られた一人であった。彼は、The Archaeological Survey of the Netherlands East Indies の先史学者である。

先史時代から、インド方面からインドシナ、さらに東インド諸島への民族の交流があったことが考えられているが、内陸の交易ルートは川沿いにとられることが多い。水と食料が

手に入れやすく、交通できるルートがとりやすいからである。ノーイ川の周囲には、石灰岩地帯がひろがっているが、けっして急峻ではなく、この付近のテナセリウム山脈は、方に盆地を形成していて、むしろなだらかな山のつらなりである。だからこの川は、ビルマ方面とタイ側をむすぶ交易ルートの一つにかぞえあげられる条件をととのえており、したがって鉄道が敷設されるルートに沿って、先史時代の遺物が発見されることが期待されるのである。捕虜として労働に従事する先史学者の van Heekeren にとって、そのような場につれてこられたことは、まだしも幸運であったといえるかもしれない。

タイ国に送られた1943年2月以後、彼は先史時代遺物の発見に注意を集中した。<sup>11)</sup> 捕虜の身である彼にとっては、組織的調査など思いもよらなかったが、建設に際して掘りかえされた土塊や溝の中に、遺物が発見されなかつたかと注意をはらうことをおこたらなかつた。そして、はやくも3月には、カンチャナブリの西25kmのところのバン・カオという村の近郊で、ノーイ川に沿う砂礫層の中から、型式学的には前期旧石器文化に属すると思われる石器を6個採集することに成功した。<sup>12)</sup> 彼は、この石器は北インドの前期旧石器時代のソアン文化の系譜をひくものと考え、その地質時代を中期洪積世と考えた。<sup>13)</sup> その石器が *in situ* の状態を発見されたとされている砂礫層の堆積時期は、van Heekeren が考えている中期洪積世よりもっと新しいと考えられる可能性もある。<sup>\*</sup> わずかな資料だけからは、すぐには結論はひきだせない。

彼は、ひきつづいて、同じ3月に表面採集ではあるが新石器を、6月には洞窟堆積物のなかから中石器のものらしい石器を、バン・

\* バン・カオ付近の第四紀層の地質調査をした高谷(京都大学東南アジア研究センター)による意見。

カオよりさらに上流のワン・ポーという村の付近で発見している。<sup>10)</sup>

van Heekeren と同じように労働に従事していた捕虜のなかには、たとえば、限られた乏しい材料で鉄道建設風景を描写したもの、鱗翅目の採集をしているもの、鳥類学についての記録をとっているものもいたとのことである。<sup>10)</sup> van Heekeren は貴重な遺物の収集に成功はしたが、日本軍による所持品検査は彼を悩ませる問題であった。じっさい、記録をとっていたノート類はもちろん、全採集品は日本軍にいったん没収されてしまった。13カ月間労働に従事したのち、彼は、1944年6月に日本に移送され、終戦をむかえた。そして、彼のコレクションのうち重要なものは、彼の手元にもどされた。<sup>11)</sup> そして現在、旧石器3個をふくめて、8個が Harvard University の The Peabody Museum に保管されている。<sup>3), 11)</sup>

戦後、自由の身となった彼は、タイ国で採集した石器について報告をした。<sup>10), 11)</sup> これがタイ国に関する旧石器をあつかった最初のものであった。彼はその報告書のなかで、旧石器は打割石器の前期旧石器文化に属するものとして、タイ国にみられるこの文化にフィンノーイ文化と名づけた。<sup>11)</sup> (Fingnoiはノーイ川の意味らしいがタイ語ではなく、きわめてあいまいな用語である。<sup>3)</sup>) また中石器については、型式はことなるが石器の製法は彼の名づけたフィンノーイ文化の流れを受けつぐものと考え、時代は後氷期とし、それと同じ時期に東南アジアに広く分布しているホアビン文化に属するものとしている。<sup>11)</sup>

この石器の発見は先史学者の注意をひいた。たとえば、アジアの旧石器文化の研究をしている Harvard University の H. L. Movius, Jr. は、とくに旧石器について、型式学的には上ビルマの前期アニャト文化の旧石器と対比すべきだという意見をのべている。<sup>5)</sup> さらに

にこの文化のにない手は、ジャバのパチタン文化、中国の周口店文化と同じく、いわゆるピテカントロプスの仲間であろうと考えている。<sup>5)</sup> そして同時に、ノーイ川周辺を詳細に調査・発掘することの必要性を強調している。研究はすぐには進展しなかったが、Movius, Jr. に刺激された Harvard University の K. G. Heider が、1956年10月にバンコクの National Museum の協力を得て、van Heekeren が旧石器を発見したバン・カオの付近を調査して歩いた。<sup>2)</sup>

Heider は調査の重点を村人への聞き込みにおいた。遺物が発見される可能性の高い砂礫層、洞窟の有無、さらには古い時代の石器、土器片などを見かけたことがないかどうかについて聞き込んだ。<sup>2)</sup> この種の調査にとって、聞き込みによって情報を得ることがきわめてたいせつである。1カ月ばかりの調査の結果、Heider は100個以上の石器類を収集したが、とくに重要なのは、新石器時代と青銅器時代の遺跡を発見したことである。

村人によってもたらされた磨製石器と土器片に興味をいだいた Heider は、それらが発見されたという地点を実地に調査して、それが1エーカー以上の広さにおよぶ新石器時代の集落遺跡であることを確認した。<sup>2)</sup> 彼はこの遺跡を、発見者の名前を記念して Bang Site と呼び、近い将来に大規模な組織的発掘のおこなわれる必要があることを強調した。<sup>2)</sup> この遺跡は、今回のタイ・デンマーク合同調査隊によって発掘がおこなわれ、その結果については、Vol. II, Ban-Kao の部に報告がなされている。

さらに Heider はワン・ポーで、その前年に製材所の建設にあたって多量の土砂がノーイ川岸から採取されたさい、多数の壺、磨製石器、青銅器などが発見されたという情報を得た。<sup>2)</sup> 壺のなかには石、青銅製の斧の入っているものや、ヒトの頭骨の入っているもの

があって、斧はおそらくヒトを埋葬したときの副葬品であろうと彼は考えている。彼はこの遺跡に Sawmill Site と名づけた。これもタイ・デンマーク合同調査隊によって発掘がなされている。その結果は、Vol. IV に報告されるはずである。

Heider のこの調査は、予備踏査といわれるにふさわしいが、みじかい期間にもかかわらず十分な成果が得られている。これによってノイ川の流域には、旧石器時代から青銅器時代にいたるまでの先史時代遺跡が散在することがあきらかにされ、あとにつづく本格的発掘調査隊成立の下地を十分につくっているのである。しかし、その主役はアメリカではなく、先史学の分野で古い伝統をもつデンマークであった。

### III タイ・デンマーク合同調査隊の成立

ノイ川流域地方へ先史学的調査遠征隊を送る計画は、1959年から60年にかけて、タイ国 The Siam Society の The Research Center のディレクター、J. Boeles と駐タイ・デンマーク大使の E. Munck との間の会談を通じて具体化されはじめた。The Research Center はデンマークと深い関係をもつ研究機関である。両者の間で、大規模の考古学遠征隊を送るにあたっては、次の2点の目標に沿ってなされるよう話し合われた。その内容は、(1) とくに重要な地点での調査ならびに発掘は、タイ国からはほんのわずかのことしか知られていない先史時代についての知識を増すものでなければならない。(2) 調査はデンマークとタイ国（とくに The Fine Arts Department of Thailand と The Siam Society) の研究者の協同でおこない、得られた結果は今後のタイ国における科学的調査にとって利益をもたらすものでなければならない。というものである。

ついで、この計画の推進母体となる委員会

がコペンハーゲンで結成された。この遠征に参加する研究者が関係をもつ各種研究団体のほかに、The Board of the East Asiatic Company Ltd., The Otto Mønsted Foundation, The Danish Expedition Fund の代表者もメンバーとして加わって、この3団体が遠征のための資金の援助をすることになり、委員会は、遠征隊を2度にわたって派遣することを決定した。デンマークの社会には、この種の調査のための組織が確立されやすい風土ができあがっているようである。

委員会の決定は、まず初年度は1960年の冬（タイ国では乾季）に主に情報を集めるための予備調査隊を送り、それによってよい結果が得られれば、次年の冬により大きな調査隊を組織するというものであった。The Siam Society も、この計画に資金援助もふくめて積極的に協力することを決定した。調査隊長には、Universitets Mineralogisk-Geologiske Institut, Copenhagen の古生物学者 E. Nielsen がえらばれ、調査地域はノイ川と、その東を流れるヤーイ川にはさまれた地域に重点がおかれることになった。収集品の帰属については、研究と報告書出版のために、主要サンプルはデンマークに送られるが、そのうちに、原則としてバンコクに返還されるということが、あらかじめ両国の間で話し合われている。

さらに、この遠征隊には、もともとこの調査隊成立のきっかけをつくった van Heekeren も参加、協力することになった。彼は、当時はすでに Rijksmuseum voor Volkenkunde, Leiden に移っている。現地の事情に精通しているということ以上に、東南アジアの先史学を研究している van Heekeren の知識と経験は、この方面の研究にあまり経験をつんでいないデンマークにとっては、きわめて貴重である。

#### IV 予備調査隊

1960年度の予備調査隊には、タイ側から National Museum の Chin Y. D. のほか2名、デンマーク側からは隊長の Nielsen と P. Sørensen のほか、オランダ人 van Heekeren が参加した。予備調査隊は、調査期間を二分し、前半で全調査予定地域を踏査して重要な地点を選定し、後半で試掘をおこなう。そして次年度の本調査の重点的発掘にひきつぐという大方針をうちたてた。

1960年11月に開始された予備調査では、まず、すみやかにノーイ川を、比較的大きなハウスボートをひき船でひかせてさかのぼり、タ・カヌンからはゾウ10頭を輸送の手段に使用してスリー・パゴダ・パスに到達した。その帰路に、時間に余裕をもたせて、可能性のありそうな場所をおとずれるという調査方法がとられた。この行動は警察の援助のもとにおこなわれた。地理的探検時代をしのばせる、いささか大時代がかかった行動様式がとられているが、自動車を自由に使えない現地の事情を考え合わせると、やむを得ないこととも思われる。

同様のことをヤーイ川についてもおこない、その結果、多くの地点で石器、土器片の採集をおこなった。そして、とくに重要な地点を10カ所選定し、そのうちの3カ所を後半で試掘することに決めて、年内に前半を終了した。

翌年1月からの後半の調査は、拠点の設営から着手された。前半の調査の結果試掘されることになったバン・カオ近郊の Bang Site の調査には、タイ国政府のレスト・ハウスを基地においた。また、前半の調査で発見された上流のサイ・ヨク近郊の洞窟、岩陰遺跡の発掘のためには、川岸に竹のイカダを組み、それに簡単な屋根をふいて、そこに拠点がおかれた。イカダの建設には、カンチャナブリ県庁が援助をおしかなかった。

この時点で調査隊は二つにわけられ、サイ・ヨク遺跡と Bang Site の試掘にとりかかった。両遺跡ともトレンチが掘られ、詳細に試掘がつづけられたのち、2月に予備調査は終了した。

ノーイ川のすぐそば、現河床面から20数メートルの高さにあるサイ・ヨク岩陰遺跡では、4mの深さにまでトレンチが掘られ、多数の石器とともに中石器時代のものと考えられる人骨も見つけられた。岩陰堆積物の断面の観察から、堆積物は上下2層に分けられ、下部層は旧石器時代のものであることが確認されている。さらに、これに隣接する洞窟堆積物のなかから新石器時代に埋葬された木棺とヒトの遺体、副葬品が発見された。

Bang Site では、人骨5体分とともに壺、磨製石器などの副葬品のほかに、きわめて多数の土器片、動物の骨が収集され、とくにこの遺跡の土器が、北中国の竜山文化の土器と関係をもつことが明らかにされた。

予備調査隊のもたらした結果にもとづいて、委員会は、1961年11月から、もっと規模を大きくして調査を継続することを決定した。

#### V 本調査とその結果

本調査は、予備調査に参加した6名に、デンマーク側から3名、タイ側からは2名をさらに加えておこなわれた。調査隊は最初から3班編成とされ、5地点が1961年11月から翌年3月までの間に、重点的に発掘された。発掘がなされたのは、Bang Site, Sawmill Site, サイ・ヨク遺跡のほかに、タ・カヌンに近いチャンデ洞窟と、サイ・ヨク近郊で発見された岩陰の岩壁画である。発掘は現地人雇用者を多数使って、十分に経験をつんだ研究者の指揮によってすすめられた。

本調査終了後に委員会は、出版委員会を設け、資料の整理と報告書の出版を促進するよう勧告した。出版委員会は、The Danish

State Research Foundation, The Rask-  
 ørsted Foundation, Landsdommer V. Gieses  
 Legat から出版助成金を得て、とくに重要な  
 サイ・ヨク遺跡と Bang Site の発掘につい  
 て、まず報告書にまとめられた。

サイ・ヨク遺跡 (Vol. I, Sai-Yok) の岩陰  
 の4 mにのぼる堆積物は、層序的に主に3層  
 に分けられている。

最下層は「先土器層」と名づけられ、石器  
 だけが発見されて、土器のともなわない層で  
 ある。予備調査の段階で、洞窟、岩陰で石器、  
 土器が多数発見されたため、調査・発掘の対  
 象はもっぱら洞窟と岩陰に向けられていた。  
 しかし、本調査では、岩陰遺跡に近い川沿い  
 の平地部でも、同種の石器が多数かたまって  
 発見された。おそらく当時の住人は、乾季に  
 は平地で、雨季には岩陰などで生活をする  
 という方法をとっていたのであろうと考えら  
 れている。石器の原石としては、片面剝離に  
 適したクォーツァイトが河原に多数見られる。  
 ムラサキガイに近い仲間の貝殻が多数見ら  
 れるのに対して、哺乳動物の遺骸が意外に少  
 ない。したがって当時の哺乳動物相について  
 は、くわしいことはわからない。発見されて  
 いる動物は、シカ、イノシシ、トラ、ヤマア  
 ラシ、ヘビなどの仲間の骨で、イヌの骨は  
 発見されていない。それらは現在もこの地  
 方に住んでいる種と全く同じものなので、  
 その時代としては後氷期がふつう考えら  
 れる。しかし、現在は熱帯降雨林となってい  
 るこの地方は、更新世末期の氷期の気候変  
 動を直接にはあまりひどくうけなかった  
 という点を考え合わせて、上部更新世の最  
 終段階にまでさかのぼれると考えられて  
 いる。C<sup>14</sup> など絶対年代を測定できる材  
 料は得られていない。そこで堆積物最下  
 層の年代は、いちおう紀元前8万年から  
 1万年の間(原記載は、8-10,000 years  
 B. C.)とされているが、これは検討を要  
 する。赤道に近い地方の氷期における乾  
 燥化現象も

考慮に入れねばならないからである。石  
 器自体は、ホアビンないし上部ソアン文  
 化の流れをひくものと考えられ、中石器  
 文化のものである。この層の最終段階に  
 、隣接する新石器文化との接触によって  
 磨製石器、土器があらわれている。この  
 地方の中石器文化にない手は、独自に  
 新石器文化を発達させることはなかつた  
 と推定されている。

その次の層の新石器時代のものは、埋  
 葬されたヒトの遺体とその副葬品が主な  
 採集品となっている。ノイ川沿いでは、  
 生活の中心地ないし洞窟のなかに遺体  
 を埋葬している例がいくつか発見されて  
 いる。副葬品が主な採集品である場合  
 には、その内容はかなり限られたもの  
 となり、生活の全体像を再構成すること  
 は容易でない。たとえば動物の家畜化、  
 植物の栽培化に関する直接資料は得ら  
 れていない。東南アジアの新石器時代  
 について考える場合、土器の型式、製  
 作技法についての分布が重要なポイント  
 となる。土器は、編年上の価値が高い  
 からである。サイ・ヨク遺跡の土器に  
 は、各種の製作技法がまざり合ってい  
 る一方、型式にも大きな変異が見られ  
 る。とくに黒陶などの特徴から、北中  
 国の竜山文化の系譜をひくものと考え  
 られているが、その伝播の経路は、こ  
 の遺跡の資料だけからは結論をひき出  
 せない。竜山文化に見られる基本的特  
 徴が、サイ・ヨク遺跡の黒陶にも見ら  
 れるが、伝えられた地域の自然、経済  
 、文化的な環境への適応現象を示して  
 いる。住民は半定着の焼畑農耕を主に  
 した生活様式をとっていたという推定が  
 なされている。Bang Site の新石器に  
 ともなう木片は、B. C. 1,700—1,300  
 年という値を示している。サイ・ヨク  
 の新石器時代もほぼ同じころのもので  
 あらうとされている。

最上位の層は青銅器時代のものである。  
 この時代の文化的特性は東南アジアの  
 青銅器文化のドンソン文化との関係か  
 ら考えられねば

ならない。しかし、この遺跡からの青銅器自体の出土は多くない。ドンソン・タイプの青銅器時代人が、かつてノーイ川流域にも生活していたということ以上のことはいえないとされている。

バン・カオの Bang Site (Vol. II, Bang-Kao) は、8,000平方メートルにおよぶ広大な新石器時代の集落遺跡である。発掘された資料の内容も豊富で、東南アジアでは最も重要な新石器時代の遺跡であろうと思われる。この遺跡の発掘には、予備調査の段階から Sørensen がかかりきりになって調査をすすめていた。Bang Site の新石器時代は前期と後期に分けられているが、後期のものは前期のものが連続的に発達したものとされ、後期から鉄器の使用が認められている。木片の C<sup>14</sup> による絶対年代は、前期のはじまりは B.C. 1,800年ごろ、後期のものでは B.C. 1,400年前後という値を示している。この文化も前期から竜山文化との接触が認められ、後期になると固有の文化的特性とむすびついた地方的変異が大きくなることが明らかにされている。中国文化との接触も、中国南部のものよりも、むしろ中央部のものとの接触があったと推定されている。

炬、敷石などをふくめて家屋の痕跡は、この遺跡からは何ら見つけられていない。住居の性格を示す直接の資料は得られていないが、高床式の家が建てられていた可能性が大きいと考えられている。住民はおそらく半農耕の生活をし、ブタもある程度は家畜化されていたのではないかと推定されている。遺跡から発見されている動物の骨のなかでイノシシの骨が大きな部分を占めているほか、イヌの骨も出土している。イノシシの骨学的特徴が、純野生のものとかかなりへだたりがあることから、ある程度の家畜化がなされていたのではないかと考えられるのである。釣針と魚の骨がかなり見られることから漁撈もおこなって

いたということ以上に、カヌーなどの舟も使用されていたことが推定されている。

バン・カオの遺跡は、長期にわたってヒトが生活し、その生活の様式、文化的特性を考えるうえでの資料が豊富に得られている非常に大きな意味をもつ遺跡である。その生活の全容について、Vol. V にまとめられる準備が目下すすめられているとのことである。

## VI タイ国でのその後の先史学的研究活動

タイ国における組織的な先史学的研究活動は、The Thai-Danish Prehistoric Expedition 1960-62 によって口火が切っておとされてから、各地域で活発におこなわれている。主に研究がなされている地域は、カンチャナブリ付近、東北タイ、北タイ、中部タイ、南タイである。

カンチャナブリ付近では、Chin Y. D. の指揮のもとに National Museum が、タイ・デンマーク調査隊の活動後もバン・カオで発掘を継続し、また 1965 年には P. Sørensen を隊長にした The Second Thai-Danish Prehistoric Expedition が、ヤーイ川沿いのオングバ洞窟で発掘をおこなっている。

東北タイでは、1963年から The Fine Arts Department-University of Hawaii Archaeological Salvage Program が活動を開始した。アメリカの The National Science Foundation から資金援助を受け、W. G. Solheim II によって指揮されている。コンケンに調査の基地をおき、新石器時代、青銅器時代の遺跡の発掘に重点をおいている。調査活動は現在も継続中である。

北タイでの活動は、1965年から the University of Hawaii の研究者によって、メコン川の支流、メ・チャン付近で主になされている。

中部タイで現在発掘がすすめられている遺跡のなかでは、ロプブリとウ・トンのものが

重要とされている。ロプブリ近郊の遺跡は1964年に発見され、1965年からThe Fine Arts DepartmentのVidya I.によって発掘されている。新石器時代から青銅器時代にかけての遺物が採集されている。ロプブリの北東、チャイバダンの近くで1965年に発見された新石器時代遺跡は、The Thai-British Archaeological Expeditionによって、1966年から発掘されている。ウ・トンは6世紀から11世紀にかけて中部タイでさかえたドヴァラヴァティ王朝の首都ともみなされているが、1964年から65年にかけてのSorbonne UniversityのJ. Boisselierの調査によって、この王朝に先だつ時代の遺跡があることが明らかにされた。2世紀から6世紀にかけてカンボジアにさかえた扶南王朝と同時期のものと考えられ、中部タイにおける最初の歴史時代のものとされている。

南タイでの調査は、他の地域にくらべるとおこなわれている。the University of Malayaの研究者によって、ソククラ付近で調査された結果、いくつかの遺跡があることが確認されている程度である。

### あ と が き

先史時代における長い人間の歴史の構成は、発見された遺跡の発掘の結果得られた資料にもとづいてなされる。遺跡は、時代的にも地理的にも連続して発見されることはきわめてまれである。先史学者は、時間的・地理的空白をうめる努力をほらう。今回の調査は、まず、インド、ビルマ、中国、インドシナ三国、インドネシアにかこまれた地理的な空白をうめる努力であった、と解すことができよう。

考古学ないし先史学的発掘・調査は、調査がじっさいにおこなわれるまでのいろいろにはらわれた努力の過程をもつ。H. SchliemannによるTroy遺跡の発掘などは、そのもっとも劇的なもののひとつである。今回のタイ国

における発掘・調査にも、それなりの努力の過程があった。

今回の調査のもともとのきっかけをつくったのは、van Heekerenによる旧石器の発見である。この発見には、Harvard UniversityのMovius, Jr.がいちはやく注目した。Movius, Jr.は1937年から38年にかけて、ビルマとジャバで主に旧石器時代の文化について現地調査をおこなっている。この調査隊は、The American Southeast Asiatic Expedition for Early Manと呼ばれ、地質学者のH. de Terraを隊長にしたものである。中国、インド、ジャバにかこまれた中心部のビルマで、地質学、古生物学、先史学的研究をおこなったが、具体的にはヒトの祖先の化石(いわゆるピテカントロプスの仲間の化石)の発見と、その文化についての研究を目的とした調査隊である。その結果、アニャト文化の性格は明らかにされたが、ヒトの化石は発見できなかった。van Heekerenのタイ国での旧石器の発見に注目したMovius, Jr.は、その旧石器文化のにない手の化石の発見に期待をよせていたのではあるまいか。しかし、タイ・デンマーク調査隊の活動は、化石はおろか、旧石器時代の文化については、ほとんど資料を得られずに終わっている。この調査隊のもたらした結果のうち、最も重要なのは新石器時代についてのものである。

本稿では、調査結果、内容の検討よりもむしろ、内容の紹介に焦点をあわせてまとめた。調査隊の報告書はひきつづき出版される予定である。今後出版される報告書の内容をかんたんに紹介しておく、第3巻に、バン・カオの遺跡から得られた人骨についての形質人類学に関するもの、第4巻では、チャンデ洞窟および他の地点での発掘の報告、最後に、バン・カオ近郊で新石器時代人がどのように生活していたかについて、まとめられる予定である。



## References

- 1) Beyer, H. Otley. 1952. "Notes on the Archaeological Work of H. R. van Heekeren in Celebes and elsewhere (1937-1950)," *Jour. East Asiatic Studies*, Vol. I, No. 3, pp. 15-31.
- 2) Heider, Karl G. 1957. "New Archaeological Discoveries in Kanchanaburi," *Jour. Siam Soc.*, Vol. XLV, Pt. 1, pp. 61-70.
- 3) ———. 1958. "A Pebble-Tool Complex in Thailand," *Asian Perspectives*, Vol. II, No. 2, pp. 63-67, fig. 1, pl. 1.
- 4) Knuth, Eigil. 1962. "Further Report on the Sai-Yok Excavations and the Work at Thai Picture Cave," *Jour. Siam Soc.*, Vol. L, Pt. 1, pp. 19-21.
- 5) Movius, Jr., Hallam L. 1948. "The Lower Palaeolithic Cultures of Southern and Eastern Asia," *Trans. Amer. Phil. Soc.*, n.s. Vol. XXXVIII, Pt. 4, pp. 329-420.
- 6) Nielsen, Eigil. 1961. "The Thai-Danish Pre-historic Expedition 1960-62, Preliminary Expedition 1960-61," *Jour. Siam Soc.*, Vol. XLIX, Pt. 1, pp. 47-55.
- 7) ———. 1962. "The Thai Danish Prehistoric Expedition 1960-62, A short report on the activities and results of the main expedition 1961-62," *Ibid.*, Vol. L, Pt. 1, pp. 7-14.
- 8) Sangvichien, Sood. 1966. "A Preliminary Report on Non-metrical Characteristics of Neolithic Skeletons found at Ban Kao, Kanchanaburi," *Ibid.*, Vol. LIX, Pt. 1, pp. 1-8, figs. 1-13.
- 9) Sarasin, Fritz. 1933. "Prehistorical Researches in Siam," *Ibid.*, Vol. XXVI, pt. 2, pp. 171-202. also in Selected Articles from *The Siam Society Journal*, Vol. III, pp. 101-132.
- 10) van Heekeren, H. R. 1947. "Stone Axes from the 'Railroad of Death'," *Ill. Lond. News*, Vol. CCX, No. 5677, April 5, 1947, p. 359.
- 11) ———. 1948. "Prehistoric Discoveries in Siam, 1943-44," *Proc. Prehist. Soc.*, n.s. Vol. XIV, pp. 24-32.
- 12) ———. 1961. "A Preliminary Note on the Excavation of the Sai-Yok Rock-shelter," *Jour. Siam Soc.*, Vol. ILIX, Pt. 2, pp. 99-108.
- 13) ———. 1962. "A Brief Survey of the Sai-Yok Excavation, 1961-1962 Season of the Thai-Danish Prehistoric Expedition," *Ibid.*, Vol. L, Pt. 1, pp. 15-18.
- 14) ———. 1963. "Thai-Danish Prehistoric Expedition 1960-62, Some notes on the Bronze Age of Thailand and the Excavation of the Sawmill sites at Wang Pho," *Ibid.*, Vol. LI, Pt. 1, pp. 79-84.